

聖書：マルコの福音書 11：12～25

説教題：神を信じなさい

日時：2026年2月22日（朝拝）

イエス様は十字架にかかるために、また旧約聖書が約束したメシア・王なる方として、エルサレムに入城されたことが前回の 11 章冒頭に記されました。それは十字架にかかる週の日曜日のことでした。今日はその翌日、月曜日のことから始まります。イエス様は前日、エルサレムの宮をすべて見て回った後、ベタニアに出て行かれたと 11 節最後に記されていました。そこはマルタとマリアの家であったと考えられます。そのベタニアから再びエルサレムへと向かわれます。その時、イエス様は空腹を覚えられました。ここで記されるのが呪われたいちじくの木の出來事です。この場面を読んで驚きを感じる方もおられるかもしれません。イエス様はこの木に何かあるかと思っただけで近づかれ、何も無いのを見ると、その木を呪われます。すると翌日、その木は根元から枯れてしまいます。これは一体どういうことか。イエス様は癩癩を起こしたのか。また神の力をこのように使うのはいかがなものか。そんな疑問を抱くかもしれません。しかしここはそのように読むべきではありません。ここはこの福音書にしばしば見られる「サンドイッチ構造」になっています。いちじくの木の出來事が二つに分けられ、その間に一般に「宮きよめ」と呼ばれる出來事が記されています。つまりこの二つの記事は一体として読むべきであり、互いの光の中で、もう片方も解釈すべきであるということです。反対から言えば、これらを切り離して片方を単独で解釈しようとすると誤った方向に進みかねません。

そのことを踏まえて最初の部分を見ます。イエス様は葉の茂ったいちじくの木に近づかれました。いちじくは年に二度、実をならせます。まず三月頃、葉が出る前に新芽のような、緑色で食べられる小さな実ができます。もう一回は夏から秋にかけて熟した実を結びます。今日の話に出て来るのは後者の熟したいちじくではありません。それが 13 節後半の「いちじくのなる季節ではなかったからである」の意味であると考えられます。しかし春先でも食べられる実がありました。これらは葉が出る前にできるものです。つまり葉が茂っているのだから、当然実は見つけられるはずだ——そう思ってイエス様は近づかれました。ところがそれはなかった！葉の他には何も見つからなかった！そこでイエス様はこの機会を用いて大切なことを教えようとされたのです。すなわち外側がどれほど茂っていても、実のないものは呪われ、滅ぼされる

ということです。それはまさにエルサレムとその宮のことです。イエス様は木に向かって言われました。「今後いつまでも、だれもおまえの実を食べることがないように。」これはこれから向かうエルサレムの宮に将来何が臨むのか、いちじくの木の実の運命によって示す「演じられたたとえ」だったのです。

エルサレムに着いたイエス様は宮の中で激しい行動を取られます。売り買いする者たちを追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒されました。また「だれにも、宮を通って物を運ぶことをお許しにならなかった」とあります。前日も触れた通り、これは決して突発的な行動ではありませんでした。イエス様は前日に宮を見て回り、その上で翌日、意図をもってこのことをなされたのです。だからこそエルサレムに向かう途中、実のないいちじくの木を見た時、これから宮で行おうと思っておられたことを前もって示されたのです。またこれはイエス様がまことの王であり、神殿をも支配される方であるからこそ取られた行動でした。

では、この宮の何が問題だったのでしょうか。巡礼者が遠方からいけにえを携えて来るのは困難だったため、近くで購入してささげることが律法でも認められていました。そのためには両替も必要です。売買そのものが問題だったわけではありません。問題の核心はイエス様の言葉から伺い知ることができます。

まずイエス様は17節で『わたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれる』と書いてあるのではないかと言われました。これはイザヤ書56章7節からの引用で、ここでは異邦人もこの祝福にあずかることが特に強調されています。イエス様がこの行動を起こされた場所は神殿の最も外側にある異邦人の庭であったと考えられます。異邦人はそこより内側には入れません。そこは彼らにとって唯一礼拝できる場所でした。そこがこの時、バザール会場のようになっていたのです。もともといけにえを売買する市場は、神殿の外、オリーブ山にあったようですが、大祭司カヤパの時代に神殿の中庭にもそれが導入されました。その結果、騒音と喧騒がそこでの礼拝を妨げていました。またエルサレムの市街地とオリーブ山の間にこの神殿がありましたが、そこを行き来する人々の近道としても使われていたようです。本来ここは祈りと礼拝がささげられ、神への畏れ敬いと隣人への愛が現れるべき場所です。なのにそこが商業の場となっている。確かにそこは「異邦人の庭」です。しかし神殿は、イザヤ書が言うように「あらゆる民の祈りの家」です。神は異邦人をも心にかけています。なのに、そ

の場所が軽んじられ、祈りの家となっていない。多くの人々が行き交い、商売は繁盛し、まさに外側の葉は豊かに茂っているが、その中身がない。実がない。それはまさにあの呪われたいちじくの木そのものだったのです。

またイエス様は17節後半で「それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にしてしまった」と言われました。これはエレミヤ書7章11節の引用です。「強盗の巣」とは、強盗が盗みを働く場所ではなく、罪を犯した強盗が戻って来て身を隠す場所、安心する隠れ家のことです。エレミヤ書7章を読むと、その意味が良く分かります。エレミヤ書7章9～11節：「あなたがたは盗み、人を殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルに犠牲を供え、あなたがたの知らなかったほかの神々に従っている。そして、わたしの名がつけられているこの宮の、わたしの前にやって来て立ち、「私たちは救われている」と言うが、それは、これらすべての忌み嫌うべきことをするためか。わたしの名がつけられているこの家は、あなたがたの目に強盗の巣と見えたのか。見よ、このわたしもそう見ていた——主のことば——。」ここで非難されているのは、日常生活では罪を犯しながら、宮に来て「私たちは救われている」と言って安心する姿です。そしてまた出て行って罪を犯し、再び宮に戻って来て、我々はこれらの儀式を行っているから大丈夫！と言う。悔い改めはなく、4節にある通り、「これは主の宮、主の宮、主の宮だ」と言って、自分たちの罪悪感を紛らわしているだけ。そんな宮を主がご覧になると、そこは強盗の巣に見えるというのです。悪を行う者たちの隠れ家です。これは私たちもドキッとさせられる言葉です。自らの罪を真摯に悔い改め、主の赦しを求めて礼拝に来るのはもちろん良いことです。私たちはそのように招かれています。しかし形だけ礼拝に関わり、悔い改めの実を結ばず、「私はこの主の宮と関わっているから大丈夫、救われている」と自分を安心させるだけならどうでしょう。そしてまた同じ罪の生活へと戻るなら、この場所もまた「強盗の巣」となるかもしれません。そうしたらイエス様が来て、今日の箇所と同じく、全部をひっくり返されるかもしれません。私たちも自らを点検する必要があります。

イエス様はこのようにしてエルサレムへのさばきを示し始めておられました。前後に記されたいちじくの木の出來事は、この文脈で読まれるべきです。いちじくの木への呪いは腹いせではなく、エルサレムに臨むさばきを象徴的に、目に見える形で予告する行為でした。宮を管理する祭司長や律法学者たちは当然のように怒ります。これは自分たちへの侮辱であると。彼らは群衆がみなイエス様の教えに驚嘆しているのを

見て、恐れを覚え、イエス様をどのようにして葬り去ろうかと相談を始めます。イエス様は夕方になると、また都の外へと出て行かれました。

そして翌日、再びエルサレムへ向かう途中、弟子たちはあのいちじくの木が根元から枯れているのを見ます。それでペテロが言います。「先生、ご覧ください。あなたがのろわれた、いちじくの木が枯れています。」 これを受けてイエス様は教えて行かれます。このさばきを前にしてどう生きるべきか。実を結ばずに滅びた木のようにならないために、どう歩めば良いのか。

まず言われたのは「神を信じなさい」ということでした。まさにこれがエルサレムに欠けていたものと言えます。神への信仰、神との生けるつながりがなかった。実りは神への生きた信仰から生まれます。神から来る恵みと力によってです。続く 23 節は、その信仰への招きです。「まことに、あなたがたに言います。この山に向かい、『立ち上がって、海に入れ』と言い、心の中で疑わずに、自分の言ったとおりにになると信じる者には、そのとおりになります。」 私たちは読んだ瞬間、本当にそんなことが起こり得るの？と思います。しかしここで言われているのは、神に不可能はないということです。私たちの側で勝手に限界を設けてはならない。すでに 9 章 23 節でイエス様は「できるなら、と言うのですか。信じる者には、どんなことでもできるのです」と言われました。10 章 27 節でも「それは人にはできないことです。しかし、神は違います。神にはどんなことでもできるのです」と言われました。自分の頭で考えられる範囲内でのみ、神を信じるのではなく、全能の神により頼め——そう語られているのです。

その信仰は祈りに表されるべきであるというのが 24 節です。「ですから、あなたがたに言います。あなたがたが祈り求めるものは何でも、すでに得たと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」 これはもちろん利己的な願いでも、祈ればみなかなえられるという約束ではありません。ヨハネの手紙第一 5 章 14 節：「何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるということ、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。」 大切なことは神の御心に従って祈り求めることです。私たちは主の祈りで「みこころが天で行われるように、地でも行われますように」と祈っています。ですから御心に反する祈りをささげる余地はありません。また私たちは祈りの最後に「イエス様のお名前によって」と付けますが、これは魔法の

言葉ではありません。イエス様の名を用いて祈るのですから、イエス様が良しとされること、イエス様が喜ばれることのみ祈るべきです。そうでなければイエス様の名を使うべきではありません。私たちは私たちにイエス様を与え、イエス様を通して救ってくださる神に感謝し、その神への従順の思いをもって祈るべきです。その御心に沿って祈る時、神は豊かに答えてくださる。その信仰の現れとして大胆に祈れ！とされています。その際、自らの不信仰を思う私たちは、9章24節で見た父親のように「信じます。不信仰な私をお助けください」と祈ることが許されています。その上で、なお信仰の祈りをささげるようにと招かれています。

そして最後25節で、祈りは他者の赦しと結び付けられています。イエス様は「神を信じなさい」という言葉をもって話し始められましたが、その神への信仰は先に見た「祈り」と、この「他者への赦し」に現れるものです。神との正しい関係は隣人との正しい関係にも現れなければなりません。ですからマタイの福音書5章23～24節では、礼拝に向かう途中、兄弟との問題を思い出したら、礼拝の前に、まず兄弟のところに行って仲直りしなさい、それから来て礼拝をささげなさいとされています。また「主の祈り」においても「私たちの負い目をお赦しください」という祈りとセットで「私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します」と約束します。そうしないなら、どんなに祈っても、その祈りは聞かれない。神が私の過ちを赦してくださることを心から感謝して、私たちも赦す。そうしてこそ、私たちの祈りは神に聞かれるものとなるので。そしてそのように神への生ける信仰によって生きる人こそ、神から来る力によって実を結ぶ人となるのです。

イエス様は今日の箇所でもエルサレム神殿へのさばきを示されました。この後、13章2節では、神殿の石が崩される日が来ることについても語られます。では神殿はどうなるのでしょうか。聖書が示すのは、神殿はイエス様にとって代わられるということです。神殿は神が臨在し、神と出会う場所としてそれまで機能しました。しかしそれが指し示していた本体はイエス様だったのです。私たちはもはやエルサレム神殿に行くことによってではなく、イエス様において神に近づくのです。さらに、その神殿であるイエス様と結び合わされて、私たち自身、教会が神殿となる、とも言われています。その私たちに祈りはあるのでしょうか。神への信仰、神との生きたつながりはあるのでしょうか。いちじくの木のように、外側の葉は茂っていても、主が近づいてご覧になると、良き実が何も見られないということはないのでしょうか。むしろ偽りの安心に

浸っている「強盗の巣」と化しているということはないでしょうか。イエス様は厳しいさばきを示しつつ、同時に私たちを今日の箇所を招いておられます。「神を信じなさい」「信じて祈りなさい」「赦しなさい」と。

神は実を求めておられます。その実は自分の力では結べません。しかし神に真実につながることで、イエス様を通して結ばれることによって、良き実は私たちに結ばれて行きます。私たちも神を信じ、神の御心に沿って祈り、また神に導かれて他者を赦し、愛する歩みへ進みたいと思います。そうして良き実を結び、神をお喜ばせし、神に栄光を帰す一人一人、また神の祝福があふれる神の神殿なる教会の歩みへと導かれたいと願います。